



現場からの帰社後に日報をつける従業員の職人たち。パソコンは1人1台与えられ、左官技術だけでなく総合的な人材育成が図られている。

「子どもたちがものづくりを体験し、その楽しさを感じてもらおう。そして、職人との交流が自然と生まれる場をつくり、職人を身近な存在にしたい。子どもたちが

先輩からの指導を受けながら、新米の職人が左官道場で壁塗りを練習する。何度も何度も同じ作業を繰り返すことで、自然と技術が身につくという。

に付ける必要がある」と考えていた彼は、古いしきたりを変えることを決意。34歳の時から大学に通い、経営管理の修士となった。「社員の接客技術を上げるために、地域のイベントにも積極的に参加してお客さんと接する機会を増やした。お客さんとのやり取りを通じて相手のニーズが分かるようになり、自然と社員の接客対応もよくなっていった」。ほかにも職場外でのマナー研修に社員を参加させるなど、以前の業界にない新たな手法を取り入れていった。

また左官技術向上のために始めたのが、壁の匠 左官道場。「技

### 次なる挑戦 職人ビレッジ

職人の数が減少の一途を辿る。今、職人という仕事は、若者の職業選択の候補に挙げられにくい現状がある。そんな中、彼が取り組んでいたのは、こういふ人になりたいと思われる魅力的な職人を育て上げること。そして次なる挑戦は、そんな職人と子どもたちとの接点を増やすことだ。

「子どもたちがものづくりを体験し、その楽しさを感じてもらおう。そして、職人との交流が自然と生まれる場をつくり、職人を身近な存在にしたい。子どもたちが



10月1日に西那須野駅前通りで開催された「駅西 de 美味い・上手いなすしおばら感謝祭」の一コマ。阿久津左官店の職人が子どもたちに左官体験を行っていた。

## 次の世代に技を引き継ぐために

職人といえば、あまり多くを語らず昔気質なもの。こんなイメージを持っている人も多いことだろう。しかし、時代の流れとともに職人の世界にも変化が起きている。職人の減少という課題に立ち向かい、解決に向け試行錯誤を続ける阿久津左官店の挑戦をここで紹介する。

### ——“格好良い職人”を育成し 子どもたちの憧れの職業にしたい——

#### 職人の世界に改革を

「左官職人としての修業時代、先輩から見習わなければいけない技術はたくさんあっても、人としてのマナーや礼儀などはすべてが参考になるというわけではなかった」。そう語るのは、左官職人として25年以上のキャリアを持つ阿久津氏。彼が働き始めたバブル期は、手取り足取り仕事を教えてもらえるはずもなく、技は先輩から盗んで習得するのが当たり前という時代だった。当時の先輩は、お客さんを前にしてもタバコを吸いながら作業するなど、接客マナーは決して良いものではなく、業界全体が、技術があればマナーは二の次とする雰囲気があったそう。しかし、バブル崩壊を機に仕事が激減。技術があれば仕事が取れるという時代が終わりを告げた。以前から、職人はまず人として見習われるようなマナーや礼儀を身



阿久津 一志さん Kazushi Akutsu 有限会社 阿久津左官店 代表



職人ビレッジの内装はかつて空き家だったとは思えぬほど綺麗に仕上げられ、白い漆喰が目を引く。この日は市男女共同参画広報紙「みいな」の編集会議が開かれていた

#### 若手職人に聞きました

入社2年目 小林 晋 さん  
幼稚園の先生から左官職人へと転職した小林さん。無口で怖いという職人のイメージが一転。親切で丁寧に教えてくれる先輩たちへの憧れと感謝を語ってくれた。入社後、技術を早く身につけるため「左官道場」で早朝から深夜まで自主的に練習。塗り剥がしをひたすら繰り返す「塗り壁トレーニング」を2カ月間で1000回達成した努力家。「早く仕事を任せられる職人になりたい」と笑顔で語ってくれた。

